第２言語習得研究における語彙の習得過程

田　頭　憲　二
広島大学外国語教育研究センター

はじめに

1980年代以前，語彙研究は第２言語習得研究（Second Language Acquisition）分野において，比較的関心が払われていない研究領域であった。この中でも，Meara（1980）は80年代以前の語彙研究について，「言語学習において無視されてきた側面（p.221）」であると言及し，この語彙研究の重要性を指摘している。その第２言語習得において，学習者の第１言語は重要な役割を果たすとされている（R. Ellis, 1994）。そこで，本稿においては，第１言語と第２言語の語彙習得過程の違いを指摘した後に，現在の第２言語習得理論のひとつである form-meaning connection に着目し，この考えを第２言語の語彙習得に応用をすることとする。また，その後，L1語と L2語の関係に着目をした異言語間影響研究を基に，日本の EFL 環境における意味転移という現象に着目する重要性を指摘する。

１．第１言語と第２言語の語彙習得過程

第１言語と第２言語の習得過程が類似しているかどうかという問題は，言語習得研究において重要な課題の一つであり，様々な側面において数多くの研究が続けられている（Gass & Selinker, 2001）。R. Ellis（1994）や Gass and Selinker（2001）の述べるように，未だその結論は出ていないが，言語知識を全く有さない状態から言語の習得を始める第１言語習得と，母語やその他の既存の言語知識を有した状態から目標言語の習得を始める第２言語習得の違いは大きいと考えられる[1)]。そこで，まず，語彙習得過程について，現在までの第１言語習得研究と第２言語習得研究の主な成果を概観することとする。

1.1. 第１言語における語彙習得段階

どの第１言語を習得する子どもも，その言語の習得段階において「クーイング期」(cooing stage)，「喃語期」(babbling stage)，「１語発話期」(one-word stage)，「２語発話期」(two-word stage) を経て，「多語発話期」(multiple-word stage) に至る（Foster-Cohen 1999；小林・佐々木, 1997, 2008参照)。これらの第１言語における発達段階は，以下の表１にまとめられる。

このような発達段階を経て，例えば，英語を母語とする子どもは一年間に約1,000語の割合で語彙を習得すると言われる（Nation & Waring, 1997）（表２)。また，これらの第１言語習得の中で，英語母語話者は，最終的に，高等学校卒業時に約20,000語（Nation, 1990)，また，教養のある成人の英語母語話者の場合，約50,000語の語彙を習得していると言われる（Aichison, 2003)。

表1　子どものことばの発達段階
（大久保，1981；柏崎，2002，p.73に基づく）

ことばの発達段階	特　　徴
乳児期	
(1) ことばの準備段階	情動関係，三項関係を作る。
幼児前期	
(2) 一語文の時期（1歳頃）	形式上は語の形だが，機能的にはさまざまな語用論的な意味を備えた文を表現している。
(3) 二語文の時期（1歳半頃）	電文体で，語と語をつなぐ。
(4) 第一期語獲得期（2歳頃）	「コレ，ナーニ？」と名前を聞くようになり，爆発的に語が増加する。
(5) 多義語・従属文の発生（2歳半頃）	副詞や形容詞，述語の活用，終助詞，格助詞，接続助詞の使用。
(6) 文章構成期（3歳頃）	接続詞で文同士を結んで，長い話が作れる。
(7) 一応の達成期（3～4歳頃）	日常生活に支障のない語（約1,000）と，語を組み立てる文法形式を獲得する。
幼児後期	
(8) おしゃべりの時期（4歳頃）	間投詞が多くなり，「て形」で接続した長い一発話を話す。
(9) 第二期語獲得期（5歳頃）	大人の話で使われた理解できないことばの意味を質問する。
(10) 文字関心集中期（就学期）	受身や使役形，接続表現等の間違いはまだ多い。

表2　英語母語話者の語彙サイズ
(Nation, 1990, p.12)

Age in years	Vocabulary size	Investigator
1.3	235	Kirpatrick
2.8	405	Kirpatrick
3.8	700	Kirpatrick
5.5	1,528	Salisbury
6.5	2,500	Termon and Childs
8.5	4,480	Kirpatrick
9.6	6,620	Kirpatrick
10.7	7,020	Kirpatrick
11.7	7,860	Kirpatrick
12.8	8,700	Kirpatrick
13.9	10,660	Kirpatrick
15	12,000	Kirpatrick
18	17,600	Kirpatrick

これらの語を習得する段階として，Aitchison (2003) は以下の三段階に分類を行った。第1に，第一段階である「ラベリング」(labeling) は，ある音の連続より，その音の意味する事物を発見し，「ラベル付け」(naming) を行う段階とされており，約1歳から2歳の間に行われる。その後，「語彙の爆発的増加」(naming explosion) が起こる。その後の，第二段階の「パッケージング」(packaging) は，個々のラベル付けされた事物を，概念というカテゴリーに分け，意味概念を形成する段階とされる。この際，その語の中核的意味より習得し，その後，周辺的意味へと広がる。最終段階である「ネットワーク構築」(network building) においては，個々の単語の音韻的，意味的，統語的，そして書記的関係を発見し，ネットワーク化する段階とされる。その際には，音韻的，統語的ネットワーク化が第一に行われ，小学校高学年以降，意味的ネットワーク化が行われる。しかし，このネットワーク構築は，とても遅い過程（“tortoise-like process”）であると

されている（Aitchison, 1994）。

このように，第１言語習得における語彙研究では，子どもが語彙を獲得する過程として様々な実験がなされ，多くの理論とともに言語習得における様々な制約が提案され，現在も活況を呈している（e.g., 今井・針生，2007；小林，1995，2008）。

1.2. 第２言語における語彙習得段階

英語を第２言語として学習する日本人英語学習者の場合，大学生を対象に調査を行った高島（2002）によると，その語彙数は2,600語ないし2,700語であると報告がなされている。しかし，一方で，第２言語においてこのような語彙数を持つこととなったその語彙習得段階については，現在までに明快な説明がなされていないのが現状である。このように，未だ第２言語における語彙習得過程について明らかとなっていない状況において，Schmitt（2000）は，以下のような見解を述べている。

> Still I *believe* the following account is representative of how the acquisition of different word knowledge aspects actually occurs: On the first exposure to a new word, all that is likely to be picked up is some sense of word form and meaning. If the exposure was verbal, the person might remember the pronunciation of the whole word, but might only remember what other words it rhymes with or how many syllabus it has. If the exposure came from a written text, the person may only remember the first few letters of the word. Because it was only a single exposure, it is only possible to gain the single meaning sense that was used in that context. It is also possible that the word class was noticed, but not much else. As the person gains a few more exposures, these features will be consolidated, and perhaps some other meaning senses will be encountered. But it will probably be relatively late in the acquisition process before a person develops intuitions about the word's frequency, register constraints, and collocational behavior, simply because these features require a large number of examples to determine the appropriate values.
>
> (Schmitt, 2000, p.117, italics added)

この記述にあるように，第２言語の習得過程を明らかにする必要性があるにも関わらず，未だ応用言語学における第２言語の語彙研究はその語彙習得過程について何も明らかになっていないのが現状である。特に，どのように語彙が習得されるのかという発達の過程をモデルという形で解明する必要がある。そこで，第２言語習得研究分野の中でも，語彙研究よりも発展をしている（R. Ellis, 1995），統語研究を中心とした第２言語習得研究の知見を利用することにより，第２言語の語彙習得過程の一端を明らかとすることとする。

2．第２言語の語彙習得における Form-meaning connection

現在の第２言語習得研究によると，学習者がある言語を習得する際には，新しい言語形式（form）に意味（meaning）を結び付ける form-meaning connection（以下，FMC）という作業を行うこととなる。その際，FMC は，(1) 初期の connection の構築（making the initial

connection), (2) connection の後続処理 (subsequent processing of the connection), (3) connection の検索(accessing the connection for use)の3つの過程を経ることとなる(VanPatten, Williams, & Rott, 2004)。この中でも初期の段階である connection の構築について, VanPatten, Williams, and Rott (2004) は "The learner either accesses a semantic, conceptual, or the learner notes from the surrounding linguistic or social context that there is a new meaning or concept to be acquired and that a particular form expresses that meaning." (p.5) と述べている[2)]。

この FMC の構築は文法形式に比べ, 語彙項目においてより容易に形成をされるとされており (Gass, 2004; VanPatten, 1990), 語彙習得の場合においても同様のことが言える。学習者はその語の習得において語形の特徴 (formal feature) よりも語の意味 (meaning) に対して, より多くの明示的な注意を向ける (N. Ellis, 1994, 1995)。その結果, 学習者は新たな L2語を学習する過程で L2語の形式 (綴りや音) と意味との間に, 「写像」(mapping) を行うこととなる (Jiang, 2002)。

多くの研究者により, 子どもの第1言語語彙習得研究においては, form-meaning mapping という第2言語習得研究における FMC と同様の意図で用いられる現象の重要性が指摘されており, その重要性が未だ大きな研究の焦点とされてきている (今井・針生, 2007)。一方, 第2言語の語彙研究においては, 近年多くのバイリンガル研究によって, 様々なバイリンガルに関するモデルが提案されているが, それらのモデルの多くは, L1心的辞書と L2心的辞書, そして, それら2つの心的辞書と概念とがどのように相互に連結されているかに研究の焦点を置いている (e.g., De Groot, 1992; Kroll & Stewart, 1994)。そのため, L2語の form-meaning mapping において, 形式は既存の意味体系に結合されるのか, または, 新たな意味体系が構築されるのかという議論はなされていない。Jiang (2004a) は, このような現在の状況について以下のように述べている。

> Given the amount of research that has been conducted on this topic [how the two languages of a bilingual speaker are connected to each other and to conceptual representation], it is surprising that the issue of whether L2 words are linked to existing meanings or concepts or to newly created ones has rarely been addressed.
>
> (Jiang, 2004a, p.419)

つまり, 第2言語の語彙習得研究においては, FMC の構築について未だ限られた議論に留まっている状態であると言える (e.g., N. Ellis, 1997; Henriksen, 1999; Jarvis, 2000; Jarvis & Odlin, 2000; Pavlenko, 1999)。そこで, 以下では, 語彙の習得の場合における FMC の「形式」と「意味」が意味するものを明らかにすることで, 上記の疑問に答えることとする。

2.1. 語の形式

FMC における形式 (form) について, VanPatten, Williams, and Rott (2004) は, "We take form to mean a surface feature of language or a surface manifestation of an underlying representation" (p.1) と述べ, 以下の6つの例を挙げている (pp.1-2)。

(1) lexemes: *eat* (Eng.), *com-* (Spa.), *mang-* (Fr.),
(2) verbal inflections: *-ed* (Eng.), *-ó/-é* (Span.), *-it/-u* (Fr.)
(3) nominal inflections: *he/him* (Eng.), *él/le/lo* (Span.), *il/lui/le* (Fr.)
(4) nominal derivational inflections: *dis-advantage, thought-less*
(5) adjective inflections: *abierto/abierta* (Span.), *overt/overte* (Fr.)
(6) functors including complementizers, classifiers, determiners, and particles such as *wa* and *ga* in Japanese

このうち，第２言語の語彙習得における形式とは，「語彙素」(lexemes) のことであり，FMC の構築にはこの L2語の形式により様々な影響を受けることとなる。そのため，例えば，L2語の形式が L1語の翻訳相当語と異なる場合には，学習者が FMC の構築をすることが難しくなる (VanPatten, Williams, & Rott, 2004)。この L2語と L1語の形式の類似性という点において，「同根語」[3] (cognate) が挙げられる。L1語と L2語が同根語である場合，一般的に対象言語と同じく FMC の促進を行うのに対し (Lotto & De Groot, 1998)，false cognate (例，英語の *actual* とドイツ語の *aktuel*) の場合には，正しく FMC の構築が確立されない。この同根語は，多くの研究者により，語彙の学習研究の中で使用されてきた語彙特性の１つである (e.g., De Groot & Keijzer, 2000; Ellis & Beaton, 1993; Kroll, Michael & Sankaranarayanan, 1998; Lotto & De Groot, 1998)。その効果は，「同根語効果」(cognate effect) と呼ばれ，(1) 符号化，(2) 記憶表象，(3) 検索の３つの観点より説明がなされる (De Groot & Keijzer, 2000; Lotto & De Groot, 1998)。符号化の観点からは，同根語の場合にはその語の翻訳語と形式的，音韻的な類似性を持つため，学習者が学習すべき情報量が少ないという主張である。また，記憶表象の観点からは，同根語は言語間において共有する表象を持つのに対し，「非同族語」(noncognate) の場合には言語特有の表象を持つとする見方である (Sánchez-Casas & García-Albea, 2005)[4]。また，最後に，検索の観点より，同根語の場合にはその形式的な類似性が，後のテスト時の検索の際に想起のための「強力な手がかり」(strong cue) となるとしている。このうち，特に，語彙の習得過程の初期の段階であると考えられる FMC の構築という面においては，学習情報の少なさという点において，同根語により FMC の構築が容易となると考えられる (e.g., De Groot & Keijzer, 2000; Lotto & De Groot, 1998)。一方，日本語と英語の場合のように，同根語を持たない言語間においては，この正しく FMC の構築が確立されない可能性が指摘される。

2.2. 語の意味

Anderson (1984) の one-to-one principle によると，学習者は初期の段階において，１つの形式に対し１つの意味をマッチさせることを好み，少なくとも初期の段階においては，１つの言語形式はある１つの意味に「写像」(mapping) される。その結果，その後の新たな意味との写像は，遅延または抑制されると主張する。この主張に基づいた場合，まず，学習者の頭の中で写像される意味情報とは何であるのかについての疑問が生まれる (Jiang, 2002)。しかし，現在まで，第２言語の語彙習得の初期段階において起こる form-meaning mapping の際に，個々の L2語の形式は既存の意味体系に結合されるのか，または，新たな意味体系が構築されるのかという議論はなされていない (Jiang, 2004a, 2004b)。心的辞書の構造として，各単語の内在する情報要素として語彙素と見出し語とに分けた場合 (e.g., Levelt, 1989)，この写像される意味情報 (meaning)

にはどのような情報が含まれているのかが問題となる。

また，もう一つの疑問としては，FMCの構築において結び付けられるこれらの意味は，学習過程において構築された新たなL2語における意味情報であるのか，それとも，学習者が既に持つ既存のL1語としての意味情報であるのかという点である。この点について，写像される意味情報は，現在までに2つの考え方がなされている。例えば，学習者は新たなL2語を学ぶ際に，第2言語に独自の新規の意味（L2語での意味情報）を習得すると想定されることが多い（e.g., Bogaards, 2001; R. Ellis, 1995; Henriksen, 1999）。一方，Ausubel（1964）は成人学習者と幼児学習者との違いについての研究の中で，成人学習者は“need not acquire thousands of new concepts but merely the new verbal symbols representating these concepts”（p.412）と述べ，語彙習得において写像される意味情報としては，学習者の既存の意味情報であることを示唆している。特に，成人と子どもの取る語彙の学習方略は異なっている（Chen, 1990）。成人は，一般的にL1語の助けを基にその語の学習を行うのに対し，子どもの場合には，絵や実物などの具体的なメディアを通して教授がなされることが多い（Chen, 1992）。また学習者自身，第1言語に依らず，L2語の意味とそれに対応するL1語の意味が等価であり，一対一の対応をすると考える傾向が強い（Adjemian, 1983）[5]。

同様に，他の研究者は，第2言語の学習者はL2語を既存の意味体系（L1語の意味情報）に写像しており（e.g., Dagut, 1977; Hall, 2002; Jarvis, 2000; Sonaiya, 1991; Strick, 1980; Swan, 1997; Zughoul, 1991），学習者の第2言語における習熟度が上がるにつれて，L2語の意味範疇の「再構築」（restructuring）が起こるとしている（e.g., Blum & Levenstron, 1978; N. Ellis, 1997; Finkbeiner, 2002; Giacobbe, 1992; Kroll, 1993; Prince, 1996; Ringbom, 1983; Strick, 1980）。そのため，第2言語の語彙習得の段階において，まず行われるのは，L2語の形式を学習者の既存のL1語での意味表象に写像することである（De Groot, 1993; Ellis, 1997; Prince, 1996; 今井・針生，2007）。特にこの傾向はEFL環境における成人学習者に当てはまると考えられる。例えば，第1言語の語彙習得においては，幼少者であってもその語に対する少ない入力量で，語の習得が行われることが知られ，この能力は，「即時（高速）マッピング」（fast mapping）と呼ばれる（O' Grady, 2005）。この能力について，自然環境の27名の子ども（ドイツ語ー英語，3歳から6歳）を対象に実験を行ったRohde and Tiefenthal（2000）は，この即時マッピングが第2言語ではあまり起こらないことを報告している。一方，Jiang（1998, 2000, 2004a; Jiang & Foster, 2001）によると，教授環境における成人学習者の第2言語の語彙習得の場合には，第1言語の語彙習得過程とは異なり，大きく以下の2点において制約を受けると主張する。まず，第1に，成人学習者がL2語の習得を行う場合，既にその語の示す概念表象を第1言語において習得しており，意味体系がすでにできあがっているという点である。第1言語習得であるL1語の語彙習得において，語の形式は文脈から抽出した意味，統語，形態素情報とともに学習されるため，これらの全ての情報は心的辞書内において内在化され，その語の使用において自動的に活性化されるようになる。一方，第2言語の学習者の多くは，意味そしてL1語での語彙体系が完結した状態において新たにL2語を学ぶため，L2語の意味を推論する際，目標とするL2語に対応する既存の第1言語の語彙システムを借用することとなる。Jiang（2000）は，この点について“Because the meanings of an L2 word can be understood through their L1 translation, the learner's language processor or language acquisition device may be less motivated to pay attention to the contextual cues for meaning extraction”（p.50）と述べている。第2に，第1言語習得に比べ第2言語習得環境

においては，入力が質と量の両方の点において貧困であるという点である。特に，成人学習者の第２言語習得の場合には，子どもの第１言語習得の状況に比べ文脈化された入力量が少ないため，学習をした語の意味を心的辞書内に統合をすることが難しくなる（Jiang, 2004a）。そのため，個々の単語の音韻的，意味的，統語的，書記的関係を発見し，学習者自らがネットワーク化することが困難となり，内在化できないままにその語は化石化へとつながる。

これらの２点において，第２言語の語彙習得過程は第１言語の語彙習得過程とは基本的に大きく異なることが分かる。つまり，学習者の第１言語における語彙習得は，学習者の経験に直接関係をしているのに対し，外国語学習環境においてはそのような経験に乏しく，母語用に確立した概念に外国語の単語を貼り付ける作業をとることとなる（今井・針生，2007）。従って，未だL1語において心的辞書が確立をされていない幼少者のL2語の習得の場合を除けば，第２言語の語彙習得は，実際に学習者が持つ第１言語の翻訳語を用いて既存の概念表象に新たな情報を付加することでFMCを確立し，その後，その連結を強化，修正する作業であり，第２言語の語彙習得段階においてL1語の意味情報は重要な役割を果たしていると言える。そこで，次に，これらのL2語が習得をされた後に，学習者の言語使用において現れるL1語の意味情報の影響を言語転移研究の結果より概観をすることとする。

３．語彙の異言語間影響

言語転移（language transfer）は，現在に至るまで研究者によって様々な捉え方がなされているが，歴史的には50年代の対照分析（contrastive analysis）を起因とする。この対照分析仮説を起点とした言語転移に対する見方が変わっていく中で，Odlin（1989）は，言語転移の問題が必ずしも母語から目標言語への転移のみだけではないと主張し，「転移とは，目標言語と，どれにしろ以前に（そして，ともすると不完全に）習得された他の言語との間の類似点及び相違点から生じる影響をいう（Odlin, 1989, p.27, 丹下，1995, p.32訳）」と包括的に述べている。この後，更に研究が進むのち，この言語転移は必ずしも母語から目標言語に向かってのみ起こるのではなく，第１言語から第２言語，目標言語から第１言語へも起きることが明らかとされた。そのため，最近では「言語転移」（language transfer）とは呼ばず，より中立的な「異言語間影響」（cross-linguistic influence; Kellerman & Sharwood Smith, 1986）と呼ばれている。この異言語間影響は，対照分析のように個別の理論に基づくことはなく，その範囲として「転移」（transfer），「干渉」（interference），「回避」（avoidance），「借入」（borrowing）等の現象を含めた様々な現象を対象として行われることとなった。

現在までの言語転移研究の特徴的な主な傾向として，迫田（2002）は，（1）負の転移は，中・上級レベルに比べて，初級レベルの学習者に多く観察されること，（2）母語と目標言語の言語的な距離は転移の一要因となること，そして，（3）転移は音声・語彙・文法形態素など広い範囲で観察され，転移しやすい領域とそうでない領域があるという３点を挙げている。これらの中でも，転移の度合いはその言語要素により異なる（R. Ellis, 1994; Jarvis & Odlin, 2000）。例えば，第２言語の統語（syntax）や形態素（morphology）に比べ，音韻的特徴や語彙的要素は，学習者の第１言語の影響を受けやすいとされ，Kellerman（1987）は“there are enourmous quantities of evidence for the influence of the L1 on IL（interlanguage）when it comes to lexis”（p.42）と述べ，語彙的要素における影響について指摘をしている。例えば，Zughoul（1991）の研究によれば，128名のESL学習者の産出をした作文における691の英語の語彙的な誤りのうち，73%以

上がL1語の干渉として考えられると指摘している。また，英語を第２言語とするオランダ語母語話者に見られた2,000の“slip of the tongue”を調査したPoulisse（1999）によると，そのうちの459例がL1語の影響を受けていると報告をしている。このようなL1語の干渉は，学習者のL1語の違いに限らず，L2語の産出における語の選択の誤りに多く見られる（e.g., Jarvis, 2000; Ringbom, 1978）。これらの語の選択という形で現れる語彙の転移による誤りは，一般的に，「形式的転移」（formal transfer または formal lexical transfer）（表３）と「意味転移」（semantic transfer または lexical transfer, lexicosemantic transfer）（表４）の二つに区分される（Jarvis & Pavlenko, 2008）[6]。

これらの転移は言語間の違いにより起こり，言語間の類似性や個別性を学習者が主体的に判断し，その判断に基づいて第１言語における語を活用するかどうかを能動的に決定している（渋谷，2002）。特に，形式的転移は学習者が言語間における大きな類似性を認め，言語間の距離（language distance）が近い場合（例，ドイツ語と英語）に起こるのに対し，意味転移は言語間の距離が遠い場合（例，ポーランド語と英語）（Biskup, 1992）または（母語，L1語，L2語のいずれでも）習熟度の高い言語からの影響により起こりやすいとされる（Ringbom, 2001）。この場合，EFL環境における日本人英語学習者の場合，第１言語である日本語と英語との言語間が遠く，また母語である日本語において習熟度が高くなるため，学習者の語の転移においては，これらの中でも形式的転移に比べ意味転移が起こりやすいと仮定される。

表3　形式的転移の種類とその誤用例
（Jarvis & Pavlenko, 2008, p.75に基づく）

種　類	誤　用　例
(1) the use of false cognate	
	Mary offers (=victim) *of violence have not enough courage to speak about it*
	（スウェーデン語 *offer* = *victim*）（Ringbom, 1987, p.157）
	the most important part of a clock, a bell sorry（オランダ語 *klock=bell/clock*）
	(Poulisse, 1999, 150)
	［日本は］どうして世界で経済場合には［世界経済のなかで］頭角になっている？
	（台湾，中級日本語学習者）（渋谷，2002, p.96）
	サラリーマンはパチンコあるいは酒館へしか行きません。（台湾，中級日本語学習者）
	（渋谷，2002, p.96）
	前は，たくさんローンは政府から学生にくれました。（アメリカ，中級日本語学習者）
	（渋谷，2002, p.96）
(2) unintentional lexical borrowing	
	and then nog one（ドイツ語 *nog* = *another*）（Poulisse, 1999, p.148）
	I *really don't know men maybe I better like to live here*（オランダ語 men=but）
	(Færch & Kasper, 1987; p.128)
(3) the coinage	
	We have the same clothers（英語 clothes とスウェーデン語 kläder（=clothes）の造語）
	(Ringbom, 1987, p.153)

表4　意味転移の種類とその誤用例
(Jarvis & Pavlenko, 2008, p.75に基づく)

種　類	誤　用　例
(1) the use of target-language word with a different meaning	
	He bit himself in the language (フィンランド語 *kieli* (=tongue/languge)) (Ringbom, 2001, p.64)
	on my grandmother's knees (ロシア語 *koleni* (=knees/lap)) (Marian & Kaushanskaya, 2007, p.375)
	multiplication and separation (ロシア語 *delenie* (=division/separation)) (Marian & Kaushanskaya, 2007, p.375)
	It isn't comfortable to live so far away. (ヘブライ語 noah (=*comfortable/convenient*)) (Dagut, 1977, p.225)
	to drive a bookshop (ポーランド語 *prowadzić* (=manage/lead/direct/drive)) (Biskup, 1991)
	I go to the oven in the morning to buy bread (=bakery) (Jiang, 1998, p.120)
	My father is a long thin man (=tall) (Jiang, 1998, p.120)
	There are many works in the city (= jobs) (Zughoul, 1991)
	... they thought it's a good possibility to catch him ... (= chance) (Lennon, 1991)
	to count someone's pulse (= take) (Biskup, 1992)
(2) the use of a calque	
	he remained a Youngman all his life (スウェーデン語 *ungkarl* (=bachelor), *ung* = *young*, *karl* = *man*) (Ringbom, 2001, p.64)

4．第2言語の語彙教授への教育的示唆

本稿においては，第2言語習得研究において現在着目をされているFMCという現象と異言語間影響の研究の知見を応用した場合，第2言語の語彙習得において，(1) 学習者はL2語の形式に学習者の既に持つL1語の意味情報を結びつけ（FMCの構築），(2) EFL環境における日本人英語学習者の場合，第1言語である日本語と目標言語である英語との言語間が遠く，また，学習者の母語である第1言語において習熟度が高くなるため，学習者の語彙の転移においては「意味転移」が起こりやすいと想定されることを指摘した。これら2点の第2言語習得研究の知見から，第2言語の語彙習得において，学習者の持つ既存の知識としてのL1語の意味情報の果たす役割が明らかとなった。

多くの言語教授場面においては，学習者の第1言語の使用が意図的に除外される傾向が強く(Cook, 2001)，特に，現在までの様々な言語教授法においては，語彙の教授の際にもできる限り第1言語での翻訳相当語以外の方法で新出語の導入がなされてきた。例えば，現在までの第2言語の教授法としても，直接教授法（direct method）においては，学習者に子どもの第1言語での言語習得と同じように学習させるという目的から，第1言語の使用は翻訳語も含め禁止されたため，新出語の定義はL2によるフレーズ（paraphrase）により行われた。同じく，耳口教授法(audiolingual method）や全身反応教授法（total physical response）等においても，その語の教授においてL1語の使用は行われてきていない。これらの多くの教授法の場合には，L2語の教授において，その翻訳相当語であるL1語を学習者に提示する代わりに，絵，文脈，言い回し(circumlocution）等の手法がとられることが多い。これらの目的は，学習者にL2語形式とL2語の意味のつながり（L2 form-L2 meaning connection）を確立させることであった。例えば，サイレントウェイ（the silent way）では，“Throughout our oral work with rods and the visual diction on the charts, we have carefully avoided the use of the student's native language. We

have even succeeded in blocking the native language so that the students relate to the new language directly" (Gattegno, 1976, p.99) と述べられている。この形式と意味のつながりは，Terrell (1986) が "binding" と呼ぶものであり，"the cognitive and affective mental process that occurs when an instructor insists that a new word ultimately be associated directly with its meaning and not with a translation" (p.214) と説明をしている。

しかし，本研究において明らかとなったように，第２言語の語彙習得における学習者のL1語の影響は，そのL2語の習得における初期の段階だけでなく，実際のL2語の使用においても大きな影響を与えていることが分かる。第２言語の語彙習得は，学習者が自身の脳の中に，学習者の既存の第１言語以外の新たな心的辞書を構成していく能動的な作業といえる。この場合，成人学習者は，その作業をできるだけ効率的，合理的なものにするために既存の知識を最大限に活用しようとする。そのため，学習者が第１言語習得において構築をしてきた第１言語の心的辞書内におけるL1語が重要な役割を果たすこととなる。例えば，実際の語彙の教授場面においても，L1語への依存を回避する意図を持って用いられることの多い絵，写真，定義，または実物を用いた教授技術においても，この学習者によるL1語への依存は回避できない可能性が高い。これは，松見 (2002) が述べるように，「学習者が絵や写真を覚えるときは，特別な教示がなくても自然に，心の中でそれらを母語で命名する確立が高い (p.102)」ためである。この点については，学習者自身も第２言語の語彙学習においてL1語の重要性を認識しているようである (e.g., Kern, 1994; Moir & Nation, 2008)。また，実際の教授効果研究の中でも，Prince (1996) は，下位群において対連合学習による課題成績が良いが，文脈学習になると成績が急に下がる理由を，L1語の表象の利用という簡便さの観点から指摘を行い，特に，初期の段階ではL2ネットワークだけに頼る技術は訳語を覚えることに比べて量的に効率が悪いと予測されるとしている。

これらのことより，今後の第２言語の語彙教授においては，L1語を "enemy" (Cook, 2001) として排除するのではなく，学習者のL1語を上手く利用し活用する必要性が挙げられる。一方，その場合のL1語の活用方法については，L1語の意味情報を加味し，その学習者の語彙習得に影響を与える要因であるとの認識が必要となる。これまで多くの研究により，語彙の学習を困難とさせる要因についての研究がなされてきた (Laufer, 1990, 1997; Nation, 1982)。Nation (1982) は，大きくそれらの要因を，(1) 学習機会 (learning opportunity)，(2) 学習スタイル (learning style)，(3) 語彙困難性 (lexical difficulty) の三つに区分している。つまり，学習時間が制限をされ，もしくは，各項目に対して費やす時間について学習者自身が制御できない場合，また，学習者が認知ではなく，想起しないといけない場合，そして，語自体が難しい場合には，その語の学習は困難となる。実際には，前者の２点については，教授者により制御をすることが可能となるが，後者の語彙自体の持つ困難度要因については制御をすることが難しい。特に，どのような語が学習者にとって難しく，また易しいのかについては，多くの場合，教授者の主観に負う部分が多い (Schmitt & McCarthy, 1997)。このような場合，多くの教授者は，どのような語が難しいのかについての判断ができると考える場合が多いが，実際には，それら教授者による主観が正しいものであるのかについての研究は未だなされていない。

今後の語彙教授においては，本研究の示した第２言語の語彙習得におけるL1語の意味情報の影響を考慮に入れる必要性が示唆される。また，一方，本研究が示唆するように，学習者によりL1語の意味情報からの影響が異なるという場合には，教授者の側によって学習者の適性に対する幾らかの配慮が必要となる。

付記

本研究は，科学研究費補助金　若手（B）18720146　による研究成果の一部である。

注

1）Bley-Vroman（1988）の指摘のように，第1言語習得と第2言語習得の違いには，例えば，第1言語習得の場合は自然習得であるのに対し，第2言語習得の場合には意図的な教授，個性，動機づけなどの学習者の情意的要素が少なからず影響を及ぼすことや，幼児と成人ではその認知能力に違いがあるなどの様々な要因が関与しており，これらを一概に比較することはできない。しかし，その上で，R. Ellis（1994）は，第1言語習得研究の成果は，次の二点から第2言語習得研究の良い出発点になると述べている。第一点目は，学習者言語の発達パターンを研究するための有効な方法を提供してくれることであり，もう一方は，第1言語の習得順序と道筋は第2言語習得過程を考える上での基本となることである。

2）このFMCの構築において，その結びつきは未だ部分的なものであり（partial to complete），頑健性においても多様で（weak to robust），また，目標言語に似通っているわけでもない（nontargetlike to targetlike）（VanPatten, Williams, & Rott, 2004）。そのため，その後の処理により一部の結びつきから完成をされたものへと他の言語要素がfilling inされるとともに頑健性を持つために強化（strengthening）される必要がある。

3）同根語とは，言語間において言語学的に「起源が同じで，綴り・発音・意味が類似している単語（松見，2001，p.204）」のことであり，ドイツ語と英語の*park*，スペイン語と英語の*color*等が例として挙げられる。

4）この考えによると，同根語の学習において，そのL2語はL1語の心的辞書表象にL1語の接辞的関連語（morphologically related words）として格納される。例えば，フランス語ー英語バイリンガルは，英語の*mary*，*marriage*，*married*とともにフランス語の*marier*，*mariage*を含むひとつの記憶表象を持つとされている（Kirsner, Lalor, & Hird, 1993）。逆に，非同根語としてのL2語は，L1語とは別個のL2語として認識をされることで，L1語ではなくL2語の記憶表象に格納をされることとなる。そのため，同根語の学習では，L1語に接辞的関連語としての新たな情報を追加することのみとなるため学習が容易となる。

5）このように既存の概念と新しいL2語を結びつけることにより，記憶に貯蔵される割合が高くなると考えられる。これは，L1語やその意味的体系は，学習者の頭の中で固定化したもの（steadiest）であるため，“cognitive hook to hang the new item on”（Fraser, 1999, p.238）としての役割を果たすためであり，このことを学習者は経験的に知っていると考えられる。

6）形式的転移と意味転移の他に，word choice transferという転移の現象が挙げられる。Jarvis and Pavlenko（2008）によると，この転移は，学習者がL2語の使用に際し，どの語のタイプ（一語動詞または句動詞等）をより好んで使用するのかを示すものである。例えば，Laufer and Eliason（1993）は，スウェーデン語母語話者の英語学習者を対象に句動詞の使用状況について調査を行い，句動詞を持つスウェーデン人学習者は，上級者であっても第1言語にはない比喩的な句動詞は回避することを示した。

参考文献

Adjemian, C. (1983). The transferability of lexical properties. In S. Gass & L. Selinker (Eds.),

Language transfer in language learning (pp. 250-268). Rowley, MA: Newbury House.

Anderson, R. (1984). The one-to-one principle of interlanguage construction. *Language Learning, 34*, 74-95.

Ausubel, D. D. (1964). Adult versus children in second-language learning: Psychological consideration. *The Modern Language Journal, 48*, 420-24.

Aitchison, J. (1994). *Words in the mind: An introduction to the mental lexicon.* London: Blackwell.

Aitchison, J. (2003). *Words in the mind: An introduction to the mental lexicon* (3rd. ed.). London: Blackwell.

Biskup, D. (1992). L1 influence on learners' rendering of English collocations: A Polish/German empirical study. In P. Arnaud, & H. Béjoint (Eds.), *Vocabulary and applied linguistics* (pp.85-93). London: Macmillan.

Bley-Vroman, R. (1988). The fundamental character of foreign language learning. In W. Rutherford., & M. Sharwood Smith (Eds.), *Grammar and second language teaching: A book of readings* (pp.19-30). Rowley, MA: Newbury House.

Blum, S., & Levenston, E. A. (1978). Lexical simplification in second-language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition, 2*, 43-63.

Bogaards, P. (2001). Lexical units and the learning of foreign language vocabulary. *Studies in Second Language Acquisition, 23*, 321-343.

Chen, H. C. (1990). Lexical processing in a non-native language: Effects of language proficiency and learning strategy. *Memory & Cognition, 18*, 279-288.

Chen, H. C. (1992). Lexical processing in bilingual or multilingual speakers. In R. Harris (Ed.), *Cognitive processing in bilinguals* (pp.253-264). Amsterdam: Elsevier.

Cook, V. (2001). Using the first language in the classroom. *Canadian Modern Language Review, 57*, 402-423.

Dagut, M. (1977). Incongruities in lexical gridding: An application of contrastive semantic analysis to language teaching. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching, 15*, 221-229.

De Groot, A. M. B. (1992). Bilingual lexical representation: A closer look at conceptual representations. In R. Frost, & L. Katz (Eds.), *Orthography, phonology, morphology and meaning* (pp.389-412). Amsterdam: Elsevier.

De Groot, A. M. B. (1993). Word-type effects in bilingual processing tasks: Support for a mixed-representational system. In R. Schreuder, & B. Weltens (Eds.), *The bilingual lexicon* (pp.27-51). Amsterdam: John Benjamins.

De Groot, A. M. B., & Keijzer, R. (2000). What is hard to learn is easy to forget: The roles of word concreteness, cognate status, and word frequency in foreign-language vocabulary learning and forgetting. *Language Learning, 50*, 1-56.

Ellis, N. (1994). Vocabulary acquisition: The implicit ins and outs of explicit cognitive mediation. In N. C. Ellis (Ed.), *Implicit and explicit learning of languages* (pp.211-282). San Diego, CA: Academic Press.

Ellis, N. (1995). Vocabulary acquisition: Psychological perspectives. *The Language Teacher,*

19(2), 12-16.

Ellis, N. C. (1997). Vocabulary acquisition: Word structure, collocation, word-class, and meaning. In N. Schmitt, & M. McCarthy (Eds.), *Vocabulary: Description, acquisition and pedagogy* (pp.122-139). Cambridge: Cambridge University Press.

Ellis, N., & Beaton, A. (1993). Psychological determinants of foreign language vocabulary learning. *Language Learning, 43*, 559-617.

Ellis, R. (1994). *The study of second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.

Ellis, R. (1995). Modified oral input and the acquisition of word meanings. *Applied Linguistics, 16*, 409-441.

Finkbeiner, M. (2002). *Bilingual lexical memory: Towards a psycholinguistic model of adult L2 lexical acquisition, representation and processing*. Unpublished doctorial dissertation, University of Arizona.

Foster-Cohen, S. H. (1999). *An introduction to child language development*. Addison Wesley Longman. [今井邦彦（訳）(2001).『子供は言語をどう獲得するのか』岩波書店]

Fraser, C. A. (1999). Lexical processing strategy use and vocabulary learning through reading. *Studies in Second Language Acquisition, 21*, 225-241.

Gass, S. (2004). Context and second language acquisition. In B. VanPatten, J. Williams, S. Rott, & M. Overstreet (Eds.), *Form-meaning connections in second language acquisition* (pp.77-90). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Gass, S. M., & Selinker, L. (2001). *Second language acquisition: An introductory course* (2nd. ed.). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Gattegno, C. (1976). *The common sense of teaching foreign languages*. New York: Educational Solutions Inc.

Giacobbe, J. (1992). A cognitive view of the role of L1 in the L2 acquisition process. *Second Language Research, 8*, 232-250.

Hall, C. J. (2002). The automatic cognate form assumption: Evidence for the parasitic model of vocabulary development. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching, 40*, 69-87.

Henriksen, B. (1999). Three dimensions of vocabulary development. *Studies in Second Language Acquisition, 21*, 303-317.

Jarvis, S. (2000). Semantic and conceptual transfer. *Bilingualism: Language and Cognition, 3*, 19-21.

Jarvis, S., & Odlin, T. (2000). Morphological type, spatial reference, and language transfer. *Studies in Second Language Acquisition, 22*, 535-556.

Jarvis, S., & Pavlenko, A. (2008). *Crosslinguistic influence in language and cognition*. New York: Routledge.

Jiang, N. (1998). *Understanding bilingual lexical organization: Evidence from masked cross-language priming in Chinese-English bilinguals*. Unpublished doctorial dissertation, University of Arizona.

Jiang, N. (2000). Lexical representation and development in a second language. *Applied Linguistics,*

21, 47-77.

Jiang, N. (2002). Form-meaning mapping in vocabulary acquisition in a second language. *Studies in Second Language Acquisition, 24*, 617-637.

Jiang, N. (2004a). Semantic transfer and its implications for vocabulary teaching in a second language. *The Modern Language Journal, 88*, 416-432.

Jiang, N. (2004b). Semantic transfer and development in adult L2 vocabulary acquisition. In P. Bogaards & B. Laufer (Eds.), *Vocabulary in a second language: Selection, acquisition and testing* (pp. 191-208). Amsterdam: John Benjamins.

Jiang, N., & Forster, K. I. (2001). Cross-language priming asymmetiries in lexical decision and episodic recognition. *Journal of Memory and Language, 44*, 32-51.

Kellerman, E., & Sharwood Smith, M. (Eds.) (1986). *Crosslinguistic influence in second language acquisition*. Oxford, UK: Pergamon.

Kern, R. G. (1994). The role of mental translation in second language reading. *Studies in Second Language Acquisition, 16*, 441-461.

Kirsner, K., Lalor, E., & Hird, K. (1993). The bilingual lexicon: Exercise, meaning and morphology. In R. Schreuder, & B. Weltens (Eds.), The bilingual lexicon (pp.215-248). Amsterdam: John Benjamins.

Kroll, J. F. (1993). Assessing conceptual representations for word in a second language. In Schreuder, R., & Weltens, B. (Eds.), *The bilingual lexicon* (pp.53-81). Amsterdam: John Benjamins.

Kroll, J. F., & Stewart, E. (1994). Category interference in translation and picture naming: Evidence for asymmetric connections between bilingual memory representations. *Journal of Memory and Language, 33*, 149-174.

Kroll, J. F., Michael, E., & Sankaranarayanan, A. (1998). A model of bilingual representation and its implications for second language acquisition. In A. F. Healy., & L. E. Bourne (Eds.), *Foreign language learning: Psycholinguistic experiments on training and retention* (pp.365-395). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Laufer, B. (1990). Why are some words more difficult than others? Some intralexical factors that affect the learning of words. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching, 28*, 293-307.

Laufer, B. (1997). What's in a word that makes it hard or easy: Some intralexical factors that affect the learning of words. In N. Schmitt, & M. McCarthy (Eds.), *Vocabulary: Description, acquisition, and pedagogy* (pp.140-155). Cambridge: Cambridge University Press.

Laufer, B., & Eliasson, S. (1993). What causes avoidance in L2 learning: L1-L2 differences, L1-L2 similarity, or L2 complexity? *Studies in Second Language Acquisition, 15*, 35-48.

Levelt, W. J. M. (1989). *Speaking: From intention to articulation*. MA: MIT Press.

Lotto, L., & De Groot, A. M. B. (1998). Effects of learning method and word type on acquisition vocabulary in an unfamiliar language. *Language Learning, 48*, 31-69.

Marian, V., & Kaushanskaya, M. (2007). Cross-linguistic transfer and borrowing in bilinguals. *Applied Psycholinguistics, 28*, 369-390.

Meara, P. (1980). Vocabulary acquisition: A neglected aspect of language learning. *Language Teaching and Linguistics: Abstracts, 13*, 221-246.

Moir, J., & Nation, P. (2008). Vocabulary and good language learners. In C. Griffiths (Ed.), *Lessons from good language learners* (pp. 159-173). Cambridge: Cambridge University Press.

Nation, I. S. P. (1982). Beginning to learn foreign vocabulary: A review of the research. *RELC Journal, 13*, 14-36.

Nation, I. S. P. (1990). *Teaching and learning vocabulary*. Boston: Heinle & Heinle.

Nation, I. S. P., & Waring, R. (1997). Vocabulary size, text coverage and word list. In N. Schmitt, & M. McCarthy (Eds.), *Vocabulary: Description, acquisition and pedagogy* (pp.6-19). Cambridge: Cambridge University Press.

Odlin, T. (1989). *Language transfer*. Cambridge University Press [丹下省吾（訳）(1995).『言語転移』リーベル出版]

O'Grady, W. D. (2005). *How children learn language*. Cambridge University Press [内田聖二（監訳）(2008).『子どもとことばの出会い』研究社]

Pavlenko, A. (1999). New approaches to concepts in bilingual memory. *Bilingualism: Language and Cognition, 2*, 209-230.

Poulisse, N. (1999). *Slip of the tongue: Speech errors in first and second language production*. Amsterdam: John Benjamins.

Prince, P. (1996). Second language vocabulary learning: The role of context versus translation as a function of proficiency. *The Canadian Modern Language Review, 53*, 478-493.

Ringbom, H. (1978). The influence of the mother tongue on the translation of lexical items. *Interlanguage Studies Bulletin, 3*, 80-101.

Ringbom, H. (1987) *The role of the first language in foreign language learning*. Clevedon: Multilingual Matters.

Ringbom, H. (2001). Lexical transfer in L3 production. In B. Cenoz, B. Hufesen, & U. Jessner (Eds.), *Cross-linguistic influence in third language acquisition: Psycholinguistic perspectives* (pp.59-68). Clevedon, UK: Multilingual Matters.

Rohde, A., & Tiefenthal, C. (2000). Fast mapping in early L2 lexical acquisition. *Studia Linguistica, 54*, 167-174.

Sánchez-Casas, R., & García-Albea, J. E. (2005). The representation of cognate and noncognate words on bilingual memory: Can cognate status be characterized as a special kind of morphological relation? J. F. Kroll, & A. M. B. De Groot (Eds). *Handbook of bilingualism: Psycholinguistic approaches* (pp.226-250). New York: Oxford University Press.

Schmitt, N. (2000). *Vocabulary in language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.

Schmitt, N., & McCarthy, M. (1997). *Vocabulary: Description, acquisition and pedagogy*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sonaiya, R. (1991). Vocabulary acquisition as a process of continual lexical disambiguation. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching, 29*, 273-284.

Strick, G. J. (1980). A hypothesis for semantic development in a second language. *Language*

Learning, 30, 155-176.

Swan, M. (1997). The influence of the mother tongue on second language vocabulary acquisition and use. In N. Schmitt & M. McCarthy (Eds.), *Vocabulary: Description, acquisition and pedagogy* (pp.156-180). Cambridge: Cambridge University Press.

Terrell, T. (1986). Acquisition in the Natural Approach: The binding/access framework. *The Modern Language Journal, 70*, 213-227.

VanPatten, B. (1990). Theory and research in second language acquisition and foreign language learning: On products and consumers. In B. VanPatten, & J. F. Lee (Eds.), *Second language acquisition/foreign language learning* (pp.17-26). Clevedon: Multilingual Matters.

VanPatten, B., Williams, J., & Rott, S. (2004). Form-meaning connections in second language acquisition. In B. VanPatten, J. Williams, S. Rott, & M. Overstreet (Eds.), *Form-meaning connections in second language acquisition* (pp.1-26). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Zughoul, M. R. (1991). Lexical choice: Towards writing problematic word lists. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching, 29*, 45-60.

今井むつみ，針生悦子（2007）.『レキシコンの構築：子どもはどのように語と概念を学んでいくのか』岩波書店.

柏崎秀子（2002）.「言語心理学エッセンス」海保博之，柏崎秀子（編）『日本語教育のための心理学』（pp.61-95）新曜社.

小林春美（1995）.「語彙の発達」大津由紀雄（編）『認知心理学　3　言語』東京大学出版会.

小林春美（2008）.「語彙の獲得」小林春美，佐々木正人（編）『新・子どもたちの言語獲得』（pp.89-117）. 大修館書店.

小林春美，佐々木正人（編）（1997）.『子どもたちの言語獲得』大修館書店.

小林春美，佐々木正人（編）（2008）.『新・子どもたちの言語獲得』大修館書店.

迫田久美子（2002）.『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク.

渋谷勝己（2002）.「学習者の母語の影響」野田尚史，迫田久美子，渋谷勝己，小林典子（編）『日本語学習者の文法習得』（pp.83-99）. 大修館書店.

髙島裕臣（2002）.『英語語彙知識の形成』雄松堂.

松見法男（2001）.「第二言語の習得ー第二言語の認知過程をのぞいてみようー」森　敏昭（編）『おもしろ言語のラボラトリー』（pp.195-219）北大路書房.

松見法男（2002）.「第二言語の語彙を習得する」海保博之・柏崎秀子（編）『日本語教育のための心理学』（pp.97-110）. 新曜社.

ABSTRACT

The Vocabulary Acquisition Process in Second Language Acquisition

Kenji TAGASHIRA
Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University

There has been a great deal of research addressing learners's second language development. By paying attention to two particular approaches in second language acquisition research, (a) form-meaning connection (VanPatten, Williams, & Rott, 2004) and (b) cross-linguistic influence (Jarvis & Pavlenko, 2008), this paper addresses the issues of how the learners learn and use a word in a second language and whether their first language influences the process of vocabulary acquisition in the second language. The results of recent studies conducted from these standpoints provide us with many fruitful suggestions for L2 pedagogy, and new perspectives on the role of first language in second language vocabulary acquisition are discussed.